

## 奉教士人と在華イエズス会「上層路線」の展開：徐光啓と宣教師サンビヤシとの交際を中心に

史, 習隼  
九州大学大学院人文科学府

<https://doi.org/10.15017/1657877>

---

出版情報：九州大学東洋史論集. 44, pp.34-57, 2016-03-31. 九州大学文学部東洋史研究会  
バージョン：  
権利関係：

# 奉教士人と在華イエズス会「上層路線」の展開 — 徐光啓と宣教師サンビヤシとの交際を中心に —

史 習 集

## はじめに

徐光啓は礼部尚書にいたった大官であり、在華イエズス会士の最も有力な保護者として、中国における天主教・西学の伝播に、きわめて重要な役割を果たした。また彼は宣教師に従って天主教義や西学を習い、関連書籍を翻訳して天主教・西学の普及にも尽力している。さらに徐光啓は、積極的に官界に有していたさまざまな人脈を利用して、宣教師たちを朝廷やほかの士大夫たちに推薦するとともに、教難の際には宣教師たちに支援を提供するなどして、布教事業の進展やその保護にも大きく貢献した。彼が布教事業に与えた影響は、まさにイエズス会士らが中国布教において採用した、「上層路線」方針の最も理想的な成功例であったと言えるだろう。

「上層路線」の伝道方針はイエズス会による東アジアの布教における顕著な特徴の一つとして、東アジアにおけるキリスト教布教に関する研究において注目されてきた<sup>1)</sup>。従来の研究では、おもに「上層路線」方針がとられた背景や、イエズス会が西学を通じて中国の知識層に与えた思想・学問的な影響などが論じられている。ただし「上層路線」方針が実際の布教において如何なる形で実行されたのか、そして具体的に如何なる効果をあげたのか、などの問題について

は、先行研究では必ずしも十分に解明されていない。イエズス会士と奉教士人との交際は、「上層路線」方針が現実に展開された典型的な事例であり、その動向と成果を把握するためには、イエズス会士と奉教士人との交際の実態について、より具体的な事例研究を進める必要があるだろう。

奉教士人とイエズス宣教師らとの交際について、明末の天主教布教・西学に関する先行研究では、おもに曆法編修や軍事改革を主とする西学東伝などの問題が論じられてきた<sup>②</sup>。しかし、体系的に、特に天主教布教自体をめぐる奉教士人と宣教師らとの交際の実態を検討した研究はいまだ乏しい。林金水氏は、マテオ・リッチ(利瑪竇, Matteo Ricci)に関する専論において、リッチと中国の士大夫たちとの交際を全体的に整理して分析している<sup>③</sup>。ただし林氏以外では奉教士人と宣教師との相互的な交流に関する論考は少ない<sup>④</sup>。代表的な奉教士人と宣教師らとの交際の実例を、イエズス会布教事業の展開と結びつけて分析すれば、「上層路線」方針の実践とその効果をより全面的に論じることができるだろう。

徐光啓と宣教師との交流に関する先行研究では、彼とマテオ・リッチとの関係に集中しており<sup>⑤</sup>、おもに西学の導入との関連で検討が行われている。ただし徐光啓とイエズス会士たちとの、多面的な交流の実態を全面的に論じ、それを天主教布教の進展のなかに位置づけた研究はなお乏しい。

さらに、従来の研究では、おもにマテオ・リッチの『中国キリスト教布教史』<sup>⑥</sup>(以下『布教史』と略称)と漢文史料が利用されている。さらに近年では、リスボンにあるアジュダ図書館(Biblioteca da Ajuda)が所蔵する一八世紀のイエズス会関係の写本から、ポルトガル人宣教師ジョン・フロイス(伏若望, João Flores)による「徐保禄進士行実」という新出史料が発見・紹介されている<sup>⑦</sup>。この史料には徐光啓と何人かの宣教師らとの交際について、貴重な記事が含まれている。そのほか、ポルトガル人宣教師アルヴァーロ・セメード(曾德昭, Alvaro Semedo)の中華帝国史<sup>⑧</sup>や、フランス人宣教師オーギュスト・コロンベル(高龍聲, Auguste Colombel)の『江南伝教史』<sup>⑨</sup>、ポルトガル人イエズス会士アントニオ・デ・ゴヴェア(何大化, António de Gouvea)のアジア布教史など、ほかのイエズス会史関係史料の

なかにも<sup>(10)</sup>、イエズス会士と江南士大夫との交際について述べている有用な記事が含まれているが、先行研究では十分に利用されていない。それらの史料を照合して考察すれば、徐光啓と宣教師らとの交際の実態をいっそう明らかにすることができるだろう。

上述した問題を踏まえて、本稿では、徐光啓とイタリア人宣教師フランチェスコ・サンビヤシ（畢方濟、Francesco Sambiasi）との交際の事例を代表例としてあげて考察をくわえる。史料的には、『布教史』や漢文史料だけでなく、上述した新出史料や、従来の研究では十分に利用されてこなかった史料を活用する。それによって、徐光啓のような官界において影響力を有する奉教士人たちが、在華天主教の存続・発展に果たした役割を検討し、イエズス会が推進した「上層路線」方針の展開とその効果について考察することにした。

## 一 徐光啓が官界で有する人脈とサンビヤシの布教活動の展開

徐光啓は万曆二三（一五九五）年に韶州ではじめて天主教に触れ、万曆三一（一六〇三）年に南京で洗礼を受けて、正式に天主教徒となった。徐光啓が天主教に改宗した時はまだ挙人だったが、二年後、進士に及第して翰林院に入った。その後は宣教師らと親密に交際し、次第にイエズス会士の最も重要な後援者となっていく。徐光啓は宣教師たちと交際するなかで、彼らから天主教の教義や西学を習い、また関係書籍を翻訳するとともに、官界における自らの人脈を利用して、宣教師らの布教事業の展開に協力していた。万曆四四（一六一六）年、ローマ・カトリック教会の枢機卿であるロベルト・ベラルミーノ（Roberto Bellarmino）から中国天主教徒全体に祝福の手紙が送られた時も、徐光啓は中国教徒を代表して返信している<sup>(11)</sup>。

近年、明末天主教に関する研究では、奉教士人が有する人脈と天主教・西学の伝播とのつながりに対してしだいに関

心が向けられつつある<sup>15)</sup>。ただしそれらの研究は、基本的には奉教士人らの人間関係の整理を概説するにとどまっている。徐光啓の官界で有する人脈が、実際に如何なる形でイエズス会の布教事業に影響を与えたのかを明らかにするために、以下、徐光啓と宣教師サンビヤシとの具体的な交際事例を検討していきたい。

宣教師サンビヤシに関する先行研究としては、王伝松氏がサンビヤシの無錫における布教活動を論じる<sup>16)</sup>。湯開建氏・王婧氏が『正教奉褒』に収録されているサンビヤシの奏摺により、彼が明朝とマカオとの外交活動において果たした役割を再考している<sup>17)</sup>。また浅見雅一氏は中国におけるイエズス会士の任官問題を検討するなかで、サンビヤシが南明の弘光政権と隆武政権に官僚として任用されたことに論及している<sup>18)</sup>。ただし以上の研究では、サンビヤシと徐光啓との交際については論じられていない。

さらに近年、中砂明德氏は、アジユダ図書館に所蔵されたイエズス会年報などを含めた大量の西洋文献を利用して、サンビヤシが北京に派遣されてから、死去するまでの軌跡を詳細にたどっている<sup>19)</sup>。そこで中砂氏は、サンビヤシと徐光啓との交際についても論及しているが、簡単な記述にとどまっており、徐光啓の持つ人脈がサンビヤシの布教活動におよぼした影響については検討されていない。

宣教師サンビヤシは万曆四一（一六一三）年に北京に派遣された。その後十数年の間に、サンビヤシは布教活動において常に徐光啓の指導と支持とを受けており<sup>20)</sup>、また徐光啓は彼の官界で有する人脈を通じて、サンビヤシの布教活動を後援していた。たとえば万曆四四年に南京教難が起った際に<sup>21)</sup>、西洋人宣教師たちはマカオに追放されることとなった。アルヴァーロ・セメードの記録によると、もともと北京で布教していたサンビヤシと何人かの宣教師たちは、みな徐光啓の故郷である上海に避難するつもりであったが、孫元化はただちに彼の息子を派遣して宣教師たちを招請した。

孫元化の招請により、宣教師たちは二手に分かれ、サンビヤシを含めた一部の宣教師らは孫元化の故郷である嘉定に避難している<sup>22)</sup>。

孫元化は、早くから徐光啓の影響を受けて天主教信仰と西学とを受容しており、改宗直後から嘉定での天主教布教を

企図しており、サンビヤシたちは、嘉定に到来した最初の宣教師であった<sup>20</sup>。彼らが嘉定に到着した後の様子について、セメードは以下のように記している。

イグナシオ博士（孫元化）は神父が到着する前に、既に神父が学習する場所を提供するための宿所を自宅の隣に用意していた。その宿所は彼の邸宅の内部にあるため、神父にとってはとても便利であった。宿所には幾つかの部屋とミサ用の礼拝堂があり、必要な家具もすべて提供されている。（中略）神父たちは布教と演説を通じて、多くの人々を引き付けた<sup>21</sup>。

孫元化は避難したサンビヤシたちに宿所や礼拝堂などを用意し、極力彼らの生活に利便をはかっていたのである。サンビヤシたちの到来は、嘉定における天主教の発展の基礎となった。孫元化と宣教師らの努力で、嘉定でも天主教は発展にむかい、孫元化は嘉定に立派な教堂を建て、セメードを含む数人の宣教師たちを招いた。その教会も後に宣教師らが常駐する住院（Residence）の一つとして使用されるようになる<sup>22</sup>。

天啓元（一六二一）年、教難はまだ鎮静化していなかったが、サンビヤシは北京に潜入し、徐光啓の北京での邸宅に寓居していた<sup>23</sup>。当時詹事府少詹事に任じられていた徐光啓は、病気のため天津で休養していたが、後金軍の攻撃を防衛するため、朝廷に召還された<sup>24</sup>。北京に戻った徐光啓は、西洋大砲の製造に関してサンビヤシたちを朝廷に推薦するとともに<sup>25</sup>、天主教の布教事業をさらに拡大するために努力していた。

この年のイエズス会年報によれば、徐光啓の知友である鳳陽府五河県の知県は<sup>26</sup>、宣教師らを尊敬し、天主教にも関心を持っていたため、サンビヤシは徐光啓の紹介により、知県に天主教を伝えるため五河県に赴いた。知県はサンビヤシに天主教に改宗したいと伝えたが、彼に妾がいたため、洗礼を受けることができなかった。正式な天主教徒にはなれなかったが、その知県は常に自分が徐光啓と同じ信仰を持っていると称していたと伝えられている。サンビヤシが五河県に滞在する数ヶ月間のうちに、彼は、知県の家族と多くの県民たちに洗礼を授け、五河県における天主教発展の基礎を築いた<sup>27</sup>。五河県から北京に帰ると、サンビヤシはふたたび徐光啓の住居に戻った。

その頃、徐光啓の門人の鹿善繼は、万曆帝の意向に背いて軍費を転用したために降職され<sup>28</sup>、座師の徐光啓へ何回も書簡を送り、苦境を訴えていた。徐光啓は鹿善繼に返信し、彼を慰めるとともに、サンビヤシら西洋宣教師を紹介し、彼らに西学について教えを請うように勧めた。その手紙のなかで、徐光啓はサンビヤシらの品行と博学を称揚し、西学、特に西洋兵法と火器の効用を強調している<sup>29</sup>。鹿善繼は最終的に天主教に改宗しなかったものの、天主教関係の書籍に序文を書いたり、宣教師らに詩文を送っていたようであり<sup>30</sup>、徐光啓の影響で天主教や西学に好意を持っていたことは疑いない。鹿善繼は孫元化と同様に、孫承宗の下僚であり、孫承宗は徐光啓の軍事改革の有力な支持者の一人であった<sup>31</sup>。また鹿善繼も徐光啓と同じように、軍事における西洋火器の重要性をよく認識していた。たとえば、鹿善繼と孫承宗の共著による『車営扣答合編』では、多くの西洋大砲を、車、歩、騎と結合して活用する戦術を論じている<sup>32</sup>。このほかにも、鹿善繼は「車営説」や「前鋒後勁説」などを著し、西洋火器の習得と使用を提唱していた<sup>33</sup>。鹿善繼による西洋火器の唱導に、師の徐光啓の影響があることは間違いない。

さらに鹿善繼の門人であり、数学と天文に通じていた薛鳳祚も、イエズス会宣教師から、徐光啓らが導入を主張していた西洋の天文算学を習っていた。天文曆法に強い興味を抱いていた薛鳳祚は、元来は旧来の曆法を学んでいたが、その後、宣教師の影響で西洋曆法を学ぶようになった<sup>34</sup>。その後、薛鳳祚はドイツ宣教師アダム・シヤール(湯若望, Johann Adam Schall von Bell) やイタリア宣教師ジャコモ・ロー(羅雅谷, Giacomo Rho) の天文算書を習い<sup>35</sup>、『天歩真原』、『天学会通』などの天文学に関する西学著作を編訳し、また水利に関する『両河清彙』を編纂している。薛鳳祚は鹿善繼を通じて、徐光啓が主唱した西学導入の系譜に連なっていたといえる。

天啓年間には、閩党(宦官派)が権勢を独占し、朝政は混乱をきわめた。朝政に失望した徐光啓は、天啓元年の年末にふたたび病気に託けて官職を退き、サンビヤシを招いて彼とともに上海に戻った。サンビヤシは上海に滞在する間、上海県とその周辺の地区において布教事業を進めながら、靈魂(亜尼瑪, Anima) 観念を語る『靈言蠡勺』を徐光啓に口述している。

天啓七（一六二八）年、サンビヤシは松江での布教による過労から、山西に休養に行くことになった。その途中、河南の開封に立ち寄った際に、サンビヤシは、洗礼名をピエトロ（伯多祿、Pietro）という山西絳州の商人に出会った<sup>36</sup>。ピエトロの招請で、サンビヤシは暫く開封に留まり、開封でも布教に従事することになった<sup>37</sup>。新しい布教拠点を開拓するには、地元の有力者の支持が必要である。オーギュスト・コロンベルによれば、ちょうどその時、サンビヤシは開封で、一人の官員と再会した。サンビヤシは北京で徐光啓の邸宅に寓居していた際に、徐光啓の紹介により、その官員と面識を持っていた<sup>38</sup>。一六二八年のイエズス会年報によれば、この官員は、官界において大きな声望を有する高官だったという<sup>39</sup>。彼の紹介を通じて、サンビヤシは開封における何人かの重要な官員の知遇を得ることができた。それらの官員たちの後援によって、開封におけるサンビヤシの布教活動は順調に進んだのである。

その後、サンビヤシは山東や南京などで布教をつづけたが、崇禎六（一六三三）年、徐光啓はサンビヤシを南京の欽天監に推薦し、日食・月食や経緯度などの測量に参加させた。彼らは、この機会を通じて、教難により重大な打撃を受けた南京の教務を復興しようと考えていた<sup>40</sup>。しかし同年、徐光啓は病気で逝去した。その後、サンビヤシは、徐光啓の門人であり、曆局における後継者であった奉教士人李天経のもとで修曆をつづけながら、朝廷の高官たちとも交際していた<sup>41</sup>。

当時、ある徐光啓の門人が、南京兵部の高官となっていた。ジョアン・フロイスによれば、徐光啓は死去する前に、この門人に手紙を書き、宣教師の布教活動を支援するように依頼していた。ジョアン・フロイスは、以下のように記録している。

徐保祿（光啓）は、生涯教会に対して熱情を持っており、たとえ病気になった時も、臨終の時でも、同様であった。神父たちがもう一度南京に入ることを成功させるために、彼は、重病になった際にも、当時南京にいるある高官に手紙を送って、ある神父を彼の保護の下に置き、神父が以前のように自由に行動できるようにした。この神父が南京に到着した時、この官員は、徐保祿がすでに亡くなっており、永遠の幸福を受けていることを知っているにも関

ならず、彼は徐保祿が手紙のなかで囑託しているように神父の面倒を見た。彼が神父のためにやったことは徐保祿の囑託以上であった。彼は神父を自らの家族のように接待するのみならず、常に神父のもとを訪れた<sup>(42)</sup>。

この官員は徐光啓の死後も、座師の恩情を忘れず、自分の家族の如く宣教師らを接待し、布教に協力していたというのである。

時期からみて、この南京に入った宣教師というのは、間違いなくサンビヤシであろう。そして南京兵部の高官とは、おそらく当時南京兵部尚書であった呂維祺を指すにちがいない。呂維祺は万曆四一（一六一三）年の進士であり、その際の会試同考官は徐光啓であった。『南吳旧話録』によると、この会試を受けた鹿善繼・呉維祺・張宗衡の三人の答案を、もう一人の同考官は評価しなかったが、徐光啓は彼らを高く評価し<sup>(43)</sup>、これによって三人は会試に合格したという<sup>(44)</sup>。このため、呂維祺は終始徐光啓に恩義を感じていたと思われる。

アルヴァーロ・セメードも、南京の官員たちはこの高官の歓心を買うために、「神父にたくさんの支援を与えていた。彼らの権力を使って、常に神父のもとを訪れるのみならず、神父に教堂を購入する金銭を与えた。現在（一六三七）四一年前後）、その教堂はさまざまな需要が満たされており、信者たちに援助が与えられている。信者の数は大きく増加した」と伝えている<sup>(45)</sup>。このように、南京の官員たちの後援や、サンビヤシの努力により、南京教難で打撃をうけた教務も、徐々に回復していったのである。

このように徐光啓は積極的に彼の官界における人脈を利用して、宣教師らと彼らもたらした西学を、周囲の官員たちに紹介・推薦することによって、官界や士人社会における天主教信仰の普及と布教事業の拡張に尽力していた。その結果、徐光啓の影響で天主教に入信し、あるいは宣教師たちに好意を持つようになった官員も少なくなかった。彼らは官界においても、地元の士人社会においても影響力を有していたため、それらの官員たちによる支援は、宣教師らの布教活動の後ろ盾となり、布教活動の進展に大きく寄与したのである。

## 二 教難における徐光啓のサンピヤシに与えた援助

前節では、徐光啓のような奉教士人が持っているさまざまな社会関係、とくに官界における人脈が、イエズス会宣教師たちの布教活動の発展に重要な役割を果たしたことを明らかにした。しかし、在華イエズス会は、徐光啓のような有力な奉教士人らの支持と協力を得ていたが、布教活動はいつも順調に進んでいたわけではなかった。中国人の外国人に対する排外思想や、天主教と仏教との衝突など様々な政治的・社会的な原因で、宣教師らが始めて中国の土地を踏んだ時から、官民の反天主教運動がしばしば起こっていた<sup>45)</sup>。

明末清初における最も著名な反天主教運動の一つは、南京教難であった。南京教難は、万曆四四（一六一六）年に南京礼部尚書沈淮が朝廷に三度にわたり「参遠夷疏」を上奏して、宣教師アルフォンソ・ヴァニョーニ（王豊肅または高一志、Alfonso Vagnoni）たちを非難したことに始まる反天主教運動であった。この教難は、天啓二（一六二二）年沈淮が葉向高によって弾劾され、致仕するまで続いた。南京教難により、宣教師らは中国境内から追放されることとなり、多くの教会施設も破壊され、在華イエズス会の伝教事業は重大な打撃を受けたのである<sup>47)</sup>。南京教難が収まった後も、各地において小規模な教難が続いていた<sup>48)</sup>。

明末における最大の反天主教運動であった南京教難については、すでに多くの研究成果が蓄積されている<sup>49)</sup>。それらの研究では、その起因・経由から、政治的・文化的背景などが、詳しく分析されてきた。これに対し、徐光啓が実際に教難において宣教師たちに与えた具体的な支援や助言については、必ずしも十分に論じられていない。

たとえば董少新氏は、近年発表された南京教難に関する論考において、徐光啓が南京教難の際に宣教師らを弁護するために書いた「弁学章疏」に基づいて、徐光啓の政治理想を論じている<sup>50)</sup>。彼は、『明史』や徐光啓文集などの漢文史料と、アルヴァーロ・セメードの『チナ帝国誌』などの宣教師史料を併用して、徐光啓の天主教信仰と彼の政治理念と

を結びつけ、南京教難において、彼が宣教師たちの保護に果たした役割を論じている。ただし董氏の研究の中心は、「学章疏」に現れた徐光啓の政治理念にあり、徐光啓が南京教難において宣教師に与えた支援全般については、十分に考察されていない。

教難において、有力な奉教士人の支援や助言は、宣教師自身はもとより、天主教会の存亡にとっても、きわめて重要であった。徐光啓のような指導的な奉教士人が、教難に際して、在華天主教会の保護に果たした役割をより全面的に考察するためには、彼が実際に宣教師らに与えた支援や助言などについて、より具体的に検討することが必要だろう。

冒頭で紹介したように、フランス人宣教師オーギュスト・コロンの『江南伝教史』や、セメードの『チナ帝国誌』、さらに新出史料であるジョアン・フロイスの「徐保禄進士行実」などの宣教師史料には、徐光啓が南京教難において宣教師らに与えた支援に関する記事も残されている。ただし南京教難に関する先行研究では、それらの史料は十分に使われていない。董氏は彼の研究のなかで、彼自身が漢訳した「徐保禄進士行実」を利用しているが、徐光啓の徳性および彼の信仰生活に関する描写が中心であり、教案に際して徐光啓が宣教師に与えた支援に関する記事は、ほとんど利用されていない。

このため、本節では、主として「徐保禄進士行実」により、漢文史料やほかの宣教師史料も併用して、徐光啓が教難の際に宣教師サンビヤシに与えた支援や、布教活動の維持のために行った努力などを具体的に検討し、徐光啓のような有力な奉教士人が、在華イエズス会の布教事業の存続と発展に果たした重要な役割について論じることにしたい。

まずは、徐光啓が南京教難の際にマテオ・リッチの墓地のに居留していたサンビヤシらの宣教師たちを、宦官の圧迫から守った経過を検討する。明代の官廷では多くの宦官がは仏教を篤信していた<sup>⑤</sup>。それらの仏教を信奉する宦官は、信仰上も利害上も、宣教師たちと対立関係にあった。天主教布教と宦官については、従来の研究では、おもに宣教師らと宦官たちとの交際や<sup>⑥</sup>、天主教に入信した宦官の事績などの問題について検討がなされている<sup>⑦</sup>。一方、宦官と奉教士人との対立や、それがイエズス会の布教事業や明末の政局に与えた影響については、従来はほとんど論じられてい

い。

こうした対立が生じた背景として、後宮の一部の宦官と宣教師たちとの間に積怨が生じていたことがあった。すなわちマテオ・リッチたちは、万曆二九（一六〇一）年に万曆帝に贈物を献上しようとした際、当時税監を担っていた有力な宦官の馬堂に妨害をうけた。宣教師らの贈物はいったん馬堂に横領され、その後また礼部に逮捕されて外国使節用の館（会同館）に収容されてしまったのである<sup>54</sup>。この事件は、マテオ・リッチたちに宦官に対する悪印象を植え付けたであろう。マテオ・リッチは『布教史』において、明朝の宦官について、「この王国で最も愚かで卑劣な連中であり、重大な事柄を扱うには最も無能で不適当な者たちだ」とまで述べている<sup>55</sup>。

万曆三八（一六一〇）年にマテオ・リッチが死去した後、内閣大学士葉向高は、スペイン人宣教師デイエゴ・デ・パントーハ（*龐迪我*、*Diego de Pantoja*）と協力して、万曆帝に上奏し、北京郊外にあった、楊姓の有力宦官の別荘を改築した寺院を、マテオ・リッチなどの西洋宣教師らの墓地として賜わることになった<sup>56</sup>。

当時、有力な宦官は大量の財産を有しており、宮殿外に別荘を持つのは稀なことではなかった。セメード『チナ帝国誌』は、宦官の宮殿外の生活について、次のように記している。

（宮殿の）外でも多くの宦官たちは工事の完成をみまもり、諸宮殿の夜警、王墓の警戒、税金の取り立て、その他の用務に当たっている。彼らはこれらの仕事による収入で大変裕福になっている。後継者がいないので、彼らは派手に金を使う。田舎にすばらしい別荘をつくり、市中には、楽しめるものならばすべてふんだんに備えた館をもっている。現実には妻がいないのだが、代わりに妻帯者同然の娛しみにことかかないようにしているので、彼らは妻帯者とみなされても、ほとんど間違いないのである。彼らの墳墓は豪華そのものである<sup>57</sup>。

上述した楊姓の宦官はまさにそのような富裕で有力な宦官だったようだ。こうした有力宦官の資産が、宣教師の墓地として下賜されたことは、宦官たちの強い反発を招いた。楊姓の宦官の親族、友人、弟子たちは、この措置を受け入れず、さらに高位の宦官や朝廷の高官などといった有力者に請願して、下賜の取消を運動したが、結局成功しなかった<sup>58</sup>。

万曆帝の没後、南京教難がまだ収束していない時点で、楊氏の宦官の親戚と側近たちは、問題の墓地を取り返そうとした。当時この墓地を保護するために、追放を免れた二人の中国人修道士、游文輝と倪雅各がそこに居住していた<sup>(69)</sup>。アルヴァーロ・セメードによれば、楊氏の親戚と側近は、何回も游文輝と倪雅各を役所へ訴えたが、受理されなかった。そのため、彼らは何人かの地元の官員に賄賂し、当時の順天府知府の支持を得ることに成功した。知府は修道士たちに準備時間もあたえず、翌日に出廷するように命じたため、修道士たちはただちに北京に滞在する徐光啓に助力を求めた<sup>(70)</sup>。「徐保祿進士行実」によれば、徐光啓は直ちにその件を受理する官員（順天府知府）に書簡を書いた。その手紙のなかで、彼は、その宦官の親戚たちの誣言に逐一反駁し、また皇帝の意思に背いて、皇帝がすでに下した恩賜を取り戻すことは、その官員自身にも危険をもたらすことを説明した<sup>(71)</sup>。その後、おそらく徐光啓の書簡が功を奏して、知事は修道士らに有利な判決をしたうえ、新たな証明文書を修道士に与えた<sup>(72)</sup>。しかし宦官の親戚と側近は諦めず、その土地を取り戻そうとつづけた。

教難の余波が徐々に収まってきた頃、北京の布教事業を復興するために、もともと徐光啓の北京での住まいに寓居していた宣教師サンビヤシは偽装して、ひそかにマテオ・リツチの墓地に移住した<sup>(73)</sup>。ジョン・フロイスによれば、宦官たちは、サンビヤシがマテオ・リツチの墓地に身を潜めていることを発見すると、公然たる追放令違反であるとして、夜間に人々を率いてその墓地を包囲した。徐光啓は宣教師たちの危険を知ると、すぐさま自宅を出て、サンビヤシたちを救援しようとした。徐光啓は、もう一人の下級官員とともにマテオ・リツチの墓地に急行し、サンビヤシをその下級官員の官服に着替えさせ、墓地から離れるつもりであった。しかしこの計画を実施する前に、徐光啓はサンビヤシが墓地から脱出したという報告を得て、ひとまず自宅に帰ったという<sup>(74)</sup>。

またオーギュスト・コロンベルによると、マテオ・リツチの墓地を宦官たちから守るために、徐光啓と、当時光祿寺少卿に任じられていた李之藻は、天主教信者を集めて墓参を行い、墓地が天主教会に属することをアピールしている。さらに徐光啓は、彼の官界における人脈を利用して、サンビヤシに対する告訴を却下させた<sup>(75)</sup>。しかし宦官たちの妨害

により、結局西洋人宣教師たちはマテオ・リッチの墓地に居留することができなくなり、サンビヤシは徐光啓の邸宅に戻ることとなった。その後、天啓元（一六二一）年、ポルトガル人宣教師マヌエル・ディアス（陽瑪諾、Manuel Diaz）が北京に派遣された時も、はじめ徐光啓の住居に寄寓している<sup>66</sup>。

このように、徐光啓は彼の官界において有する人脈や影響力を通じて、マテオ・リッチの墓地に居留していた修道士たちと宣教師サンビヤシを、教難を利用してその土地を取り戻そうとしていた宦官たちから守り、また北京に滞在する宣教師たちに可能な限り援助を提供していた。マテオ・リッチの生前には、宣教師たちが没すると、北京には墓地がなかったため、マカオで埋葬するしかなかった。イエズス会にとって、皇帝から墓地を下賜されたことは、またとない荣誉であり、宣教師らの功績が朝廷に認められたことを示す象徴でもあった。教難に際して、この墓地が徐光啓などの尽力で守られたことは、イエズス会の布教事業にとって、疑いなく重要な意味を持っていた。

次いでは、徐光啓とサンビヤシたちが南京教難の際に実行しようとしている朝鮮布教計画について考察をくわえてみよう。南京教難により、南京・北京で布教していた五人の宣教師はマカオに追放されることになった<sup>67</sup>。ほかの西洋人宣教師たちは徐光啓などの奉教士人の家に避難していたが、公然と布教活動を行うのは困難であり、在華イエズス会の布教事業は大きく頓挫した。徐光啓は在華イエズス会士の苦境を打開するため、宣教師らと協力して、明朝の使節派遣に随行して、隣国である朝鮮への布教を開拓することを計画した。

徐光啓の朝鮮布教計画についてはスペイン人 J. G. ルイス・デ・メデイナ氏 (J. G. Luis de Medina) は、イエズス会士の書簡や年報により、万曆四七（一六一九）年の朝鮮布教計画の進展とその挫折について論じている<sup>68</sup>。また初曉波氏は、おもに漢文史料を利用して、徐光啓が主張した「監護朝鮮」という外交政策を分析するとともに、また万曆四七年の朝鮮布教計画についても論及している<sup>69</sup>。ただし、欧文史料と漢文史料の双方を利用して、この朝鮮布教計画について論じた研究はなされていらない。つづいてはルイス・デ・メデイナ氏や初曉波氏の研究を踏まえて、これらの問題についても初歩的な検討を試みてみたい。

万暦年間の後半になると、女真族の後金は東北地方において急速に勢力を拡大した。万暦四七（一六一九）年明軍と朝鮮軍は連合して後金軍を包囲したが、サルフの戦いで大敗してしまふ。同年、徐光啓は上奏して、朝鮮軍の軍事力を強化して、女真を挟撃する必要を力説し、漢代に匈奴を攻撃するために西域に使者を派遣した故事に倣つて、朝鮮に使者を派遣して同盟を強化すべきだとして、彼自身が使者として朝鮮に赴くことを要請した<sup>76</sup>。

この際、徐光啓は朝鮮の軍事力増強だけではなく、これを機会として、宣教師サンピヤシを朝鮮に同行し、朝鮮国王に布教をおこない、天主教を朝鮮に伝えることも意図していたといわれる<sup>77</sup>。清朝の中国人イエズス会士李杖は、「徐文定公行実」において、次のように述べている。

（徐光啓は）宣教師らと計画を討議して、朝鮮に布教することを考えた。朝鮮では海禁が厳しく、入国が不可能だつたため、皇帝の命令を奉じて東方におもむき、（朝鮮の人民）を教化しようとしたのである<sup>78</sup>。

この計画は、実際には中国教区長ニコロー・ロンゴバルディ（龍華民、Niccolò Longobardi）の発案であつたといわれるが<sup>79</sup>、ジョアン・フロイスによれば、徐光啓も以前から天主教を朝鮮に伝播することを望んでいたという<sup>74</sup>。徐光啓と宣教師たちは、もし朝鮮国王を天主教に改宗させることができれば、朝鮮の臣民も必ず天主教に改宗するだろうと考えていた<sup>76</sup>。君主の入信によって、その臣民の天主教受容を図ることは、イエズス会がアジアにおいて常に用いていた布教方針であつた。日本・中国の布教においても、イエズス会の宣教師たちは、まず天皇や皇帝を改宗させることを模索していた。

布教のために、徐光啓とサンピヤシはマテオ・リッチが漢文で書いた天主教関係書籍を何冊も用意した<sup>76</sup>。当時、マテオ・リッチ『天主実義』などの、天主教の教理を紹介する書籍は、すでに朝鮮の朝貢使節によつて朝鮮に伝えられ、特に南人派の学者たちに受容されていた。李暉光や柳夢寅などの朝鮮知識人は、自著のなかでマテオ・リッチや天主教関係の事跡を紹介している。マテオ・リッチたちが北京に到来した際、当初は各国の朝貢使節が宿泊する「会同館」に寓居していたので、宣教師たちはそこで朝鮮の使者と接触した可能性がある<sup>77</sup>。こうした機会を通じて、イエズス会士

たちは朝貢使節から朝鮮情報を獲得し、朝鮮への布教を構想したのではないだろうか。

サンビヤシの報告書によると、「この要請により、皇帝は大きな勢威と特権をもっている博士（徐光啓）を高麗へ派遣するように命じた。直ちに出發のための準備が整えられた」という<sup>76)</sup>。しかしこの計画は、朝廷において、軍事面の重責を担う徐光啓を遠方へ派遣すべきではないという反対にあい、実行されなかった<sup>77)</sup>。

しかし徐光啓は朝鮮に赴くことを諦めたわけではなかった。彼は天啓元年に、ふたたび朝廷に朝鮮への派遣を要請した。彼が朝鮮への派遣を求めた上奏には、次のようにある。

奴（後金軍）は遼東の人民を北城に移住させ、ほしいままに危害をくわえている。丁壮は斬殺され、婦女は姦淫されている。（中略）もしこの機に一旅（の軍隊）を派遣して（人民に）呼びかければ、（明朝に）響応させることは難しくない。この機に乗ずるべきである<sup>78)</sup>。

徐光啓は翌天啓二（一六二二）年にも、ふたたび上奏して、重ねて彼自身が朝鮮に赴き、女真を牽制させることを図りたいと要請している<sup>79)</sup>。しかしこの要請も認められず、朝鮮への布教計画も実現されることはなかった。徐光啓は西洋暦法による修暦や、西洋火器による軍事改革のみならず、朝鮮への使節派遣計画においても、それを宣教師の布教活動の展開に結びつけることを図っていたのである。

さらに徐光啓は、朝鮮以外の周辺諸国における天主教布教の進展にも関心を払っていた。ジョン・フロイスによれば、徐光啓は同時期の日本におけるキリスト教弾圧についても詳しく知っており、日本の教徒が苦難のなかでも信仰を固く守っていることに喜びと安堵を感じていたという。さらにベトナムにおいてキリスト教が迫害された際には、徐光啓はベトナムの信徒たちを励ますために、直筆の長い手紙を書いたといわれる<sup>80)</sup>。このベトナムの教難とは、おそらく一六二八年に、塘外（Đàng Ngoài）の鄭氏集団（Trịnh Tráng）が、宣教師の布教活動に対して、禁令を発したことを指すと考えられる<sup>81)</sup>。徐光啓が明朝における天主教の発展に尽力したのみならず、朝鮮・日本・ベトナムなど、周辺諸国における布教活動にも強い関心を持つていたことは注目すべきだろう。

## おわりに

本稿では、漢文史料と西洋史料と併用して、明末の代表的な奉教士人であった徐光啓と、宣教師サンビヤシの交際を、イエズス会が採用した「上層路線」布教方針の展開例として、従来の研究ではあまり注目されてこなかった、徐光啓のような奉教士人の官界で有する人脈や影響力などが、天主教事業の発展と存続に対して果たした具体的な役割について考察をくわえた。最後にその要点を簡略にまとめておこう。

一、明末における最も有力な奉教士人の一人であった徐光啓は、多くのイエズス会宣教師と交際し、彼らから天主教義や西学を学び、関係書籍を翻訳してその普及につとめた。さらに彼は、積極的に彼の官界における人脈を利用して、宣教師らと彼らもたらした西学を、周囲の官員たちに推薦し、士人社会における天主教信仰の普及、および布教事業の拡張に尽力したのである。その結果、徐光啓の影響で天主教に入信した、あるいは宣教師らに好意を持つようになった官員たちも少なくなかった。

二、在華イエズス会は、徐光啓のような有力な奉教士人らの支持と協力を得ることができたが、中国人の排外思想や、天主教と仏教との衝突などの、様々な政治的・社会的な原因によって、しばしば官民の反天主教運動に見舞われた。徐光啓は、明末における最大の反天主教運動である南京教難に際して、「弁学章疏」を朝廷に上呈し、天主教信仰を弁護するとともに、宣教師たちを自宅に保護し、さらに自らの官界における影響力を利用して、皇帝から下賜されたマテオ・リッチの墓地を宦官たちから守り、危機に瀕した在華イエズス会の布教事業を支えた。また、教難により打撃を受けたイエズス会の布教事業に新天地を開拓するため、彼は自ら朝廷の使者となり、宣教師をともなつて朝鮮に赴くことも企図していた。

奉教士人の改宗は、彼らが儒教などの伝統宗教を深く奉じていたために、普通の民衆よりも時間が掛かった。しかし、

彼らの入信が在華天主教会にもたらしたものは、彼ら自身の社会地位と影響力のみならず、彼らが官界と地域社会において有する人間関係でもあった。それは、宣教師らの布教事業の発展にたいして、きわめて大きな意義を持っている。本稿で取り上げた徐光啓の事例のように、奉教士人たちは、熱心に宣教師たちに協力し、布教活動を支えていただけではなく、自らが有する人的ネットワーク、特に彼らが官界において持っている人脈を通じて、宣教師たちにとって新たな助力となりえる人物を見つけ、宣教師たちの支持者として育成する。このように、特定の中心人物から放射状に伝播する布教パターンは、イエズス会士が歩んでいた「上層路線」という布教方針の重要な展開のあり方の一つだったといえるだろう。

しかし、マテオ・リッチの後任者であるニコラス・ロンゴバルディは、もともと「文化適応」という布教方針に異議を唱えており、くわえてドミニコ会とフランシスコ会が、教皇に中国のイエズス会士たちが異教の習慣を許容していると訴えたため、清朝初期には典礼論争が発生するにいたる<sup>84)</sup>。その結果、天主教は中国文化との融合を認める柔軟性を失い、中国士人の入信を難しくすることになった。くわえて、ロンゴバルディは、士大夫よりも、入信させやすい民衆を布教の主要対象にするべきだと主張し、マテオ・リッチたちが唱導した「上層路線」の布教方針も転換した。そのため、清朝に入ると、奉教士人の数は明末よりかなり減少し、禁教が命じられた際にも、徐光啓のように天主教の擁護に努めた有力な奉教士人はほとんど現れなかった。これによって、明末に隆盛にむかっていた在華天主教会の布教事業も衰退にむかっただのである。

## 註

- (1) 代表的な研究には、孫尚揚『基督教与明末儒学』（東方出版社、一九九六年）上篇第一章「利瑪竇的伝教策略」、黄正謙『西学東漸之序章―明末清初耶穌会史新論―』（香港中華書局、二〇一〇年）第三章「在華耶穌会士之上層伝教策略」がある。

- (2) 西学東伝に関連して奉教士人と宣教師らとの交流を論じた研究としては、橋本敬造『明末の中国に伝えられた「科学革命」の成果』(関西大学『社会学部紀要』巻一三、第一号、一九八一年)、董少新・黄一農「崇禎年間招募葡兵新考」(『歴史研究』二〇〇九年第五期)、黄一農「天主教徒孫元化与明末伝華的西洋火炮」(『中央研究院歴史語言研究所集刊』六七本四分、一九九六年)などがある。
- (3) 林金水『利瑪竇与中国』(中国社会科学出版社、一九九六年)第二章「利瑪竇和中国士大夫」および付録「利瑪竇交遊人物表」。
- (4) マテオ・リッチ以外の宣教師については、計翔翔「明末在華天主教士金尼閣事迹考」(『世界歴史』一九九五年第一期)、沈定平「論衛匡国在中西文化交流史上的地位与作用」(『中国社会科学』一九九五年第三期)がある。
- (5) 徐光啓とマテオ・リッチとの交際に関する主要研究としては、孫尚揚・湯一介『利瑪竇与徐光啓』(新華出版社、一九九三年)、George H. Dunne, *Generation of Giants: The Story of The Jesuits in China in the Last Decades of The Ming Dynasty*, Kessinger Publishing, 2010、安部力「徐光啓の天主教理解について」(『中国哲学論集』第二五号、一九九九年)、張中鵬・湯開建「徐光啓与利瑪竇之交遊及影響」(『華南師範大学学报』二〇一一年第五期)などがある。
- (6) マッテオ・リッチ、アルヴァーロ・セメード(川名公平訳)『中国キリスト教布教史』一・二(岩波書店、一九八二・三年)。以下リッチ、セメード『布教史』と略称。
- (7) 宣教師ジョン・フロイスが著した『一六三三年イエズス会中国副管区年報』の一部。題名は、*Algunas cousas de edificação da vida e morte do Doutor Paulo*。本稿ではその漢訳を利用した。伏若望(董少新訳)「徐保禄進士行実」(『澳門歴史研究』二〇〇七年 第六期)。
- (8) Alvaro Semedo, *The History of That Great and Renowned Monarchy of China*, Printed by E. Tyler for J. Crook, 1655。宣教師アルヴァロ・セメードは万曆四一(一六一三)年に来華し、もともとは謝務禄という漢名を用いた。三年後の南京教難の際に、マカオに追放され、万曆四八(一六二〇)年ふたたび中国の大陸に入り、曾德昭という漢名で江南や陝西地域で伝道していた(Le P. Louis Pfister, *Notices biographiques et bibliographiques sur les Jésuites de l'ancienne mission de Chin 1552-1773*, Tome I, Imprimerie de la Mission catholique, 1932, pp. 143-145。以下同書を *Notices biographiques* と略す)。セメードが書いた中華帝国史の原稿はホルトガル

奉教士人と在華イエズス会「上層路線」の展開―徐光啓と宣教師サンビヤシとの交際を中心に―(史)

語であるが、日本国内ではポルトガル語の原文を入手するのが困難である。また、矢沢利彦により和訳された『チナ帝国誌』（大航海時代叢書、岩波書店、一九八三年）では、原稿の第三部、すなわち中国布教に関する内容が省略されているため、本稿原文の出版の直後に刊行された英訳版を使用することとする。

- (9) 高龍盤（周士良訳）『江南伝教史』一（天主教上海教区光啓社、二〇〇八年）。
- (10) Antonio de Gouvea, *Asia Extrema, Segunda parte*, Livro 1, Capítulo 3, Edição, Introd. e notas de Horácio Araújo, Fundação Oriente, 2005.
- (11) 徐光啓の返信はポルトガル語に翻訳され、リスボンにあるアジエダ図書館が所蔵する一八世紀のイエズス会関係の写本に収録されている。董少新「里斯本阿儒達図書館藏徐光啓作品三種訳跋」（『文化雑誌』第七五期、二〇一〇年）一〇九〜一三三頁。
- (12) たとえば、黄一農前掲『両頭蛇』付録七・三「科挙所形成的人脈網絡」、また肖清和「礼物与明末清初天主教的適応策略」（『東岳論叢』二〇一三年第三期）八一〜八三頁。
- (13) 王伝松「無錫天主堂第一位本堂神父畢方濟」（『中国天主教』二〇〇六年第五期）。
- (14) 湯開建・王婧「関于明末意大利耶穌会士畢方濟奏摺的幾個問題」（『中国史研究』二〇〇八年第一期）。
- (15) 浅見雅一「中国におけるイエズス会士の任官問題」（『史学』一九九六年）。
- (16) 中砂明德「イエズス会フランチェスコ・サンビアシの旅」（『アジア史学論集』三、二〇一〇年）。
- (17) 高龍盤前掲『江南伝教史』一、一五八頁。
- (18) 南京教難は、南京礼部尚書沈淮が引きおこした天主教弾圧事件である。
- (19) Alvaro Smedo, *The History of That Great and Renowned Monarchy of China*, p.224.
- (20) António de Gouvea, *Asia Extrema, Segunda parte*, Livro 1, Capítulo 3, Edição, p.199.
- (21) Alvaro Smedo, *The History of That Great and Renowned Monarchy of China*, p.224.
- (22) António de Gouvea, *Asia Extrema, Segunda parte*, Livro 1, Capítulo 3, p.200. 高龍盤前掲『江南伝教史』一、一一五頁。
- (23) Pierre Morin, "Relation de 1621," *Histoire de ce qui s'est passé es Royumes de la Chine et du Japon*, chez Sébastien Cramoisy, 1625,

- (24) 『徐氏庠言』(朱維錚・李天綱編『徐光啓全集』三、上海古籍出版社、二〇一〇年) 卷三「謹申一得以保万全疏」、二二〇頁。
- (25) 前掲『徐氏庠言』卷三「台銃事宜疏」、二一九頁。
- (26) 康熙『五河県誌』(『中国方志叢書』華中地方、成文出版社、一九八八年、一六七頁)によれば、この五河知県は、万暦年間における最後の知県であった盧自立か、天啓年間に最初の知県であった王命卿と考えられる。盧自立は河北の涑水出身の挙人である。王命卿は廣東の番禺出身の進士であり、万暦四一(一六一三)年に進士に及第したが、その際の主考官は葉向高と方從哲、同考官の一人は徐光啓であった。この知県が王命卿であったとすれば、彼は葉向高や徐光啓などの門生にあたり、こうした関係を通じて、徐光啓からサンビヤシを紹介されたと想定できる。
- (27) Pierre Morin, “Relation de 1621,” *Histoire de ce qui s'est passé es Royumes de la Chine et du Japon*, p.64. 高龍馨前掲『江南伝教史』一、一五頁より転引。
- (28) 『明史』(中華書局、一九七四年) 卷二六七、列伝一五五、鹿善繼伝。
- (29) 『徐光啓詩文集』(前掲『徐光啓全集』九) 卷八「致鹿善繼」、三三一頁。
- (30) 黄一農『両頭蛇―明末清初的第一代天主教徒―』(上海古籍出版社、二〇〇六年) 二七一―二七二頁。
- (31) 黄一農「天主教徒孫元化与明末伝華的西洋火炮」(『中央研究院歴史語言研究所集刊』第六七本、第四分、一九九六年十二月)。
- (32) 孫承宗等『軍営扣答合編』(『中国兵書集成』卷三四、解放軍出版社、一九九四年)。
- (33) いずれも鹿善繼『鹿忠節公集』卷一一(道光二八年刊、清同治五年重印)に収録。
- (34) 紀昀『四庫全書総目』(中華書局、二〇一三年) 卷一六〇、『天歩真原』提要。
- (35) 阮元『薛鳳祚伝』『畴人伝彙編』(広陵書社、二〇〇九年) 四〇六頁。
- (36) Giulio Cesare Cordara が著した *Historia Societatis Iesu (1615-1633)* (soc., t.VIII, p.236) には、この信者は河南開封の出身であると記載している。しかし、一六二八年のイエズス会年報では、この信者は Tuon Pedro と言ひ、山西絳州の出身であると記されている。

奉教士人と在華イエズス会「上層路線」の展開―徐光啓と宣教師サンビヤシとの交際を中心に―(史)

る。中砂明德氏は、この Tuon Pedro は、絳州段氏の一族であると推測している。中砂明德前掲「イエズス会フランチェスコ・サンビアシの旅」三六頁。

- (37) Giulio Cesare Cordara, *Historia Societatis Iesu*(1615-1633), soc., t.VIII, p.236. Pfister, *Notices biographiques*, Tome I, p.138 より転引。
- (38) 高龍鞏前掲『江南伝教史』一、一五七頁。
- (39) 中砂明德前掲「イエズス会フランチェスコ・サンビアシの旅」三六頁。
- (40) António de Gouvea, *Asia Extrema*, BA 49-V-11, fls 2v-3. Murta Pina, *Os Jesuitas em Nanguim (1599-1633)*, Centro Científico e Cultural de Macau, 2008, p.135 より転引。
- (41) Daniello Bartoli, *Della Cina*, Libro quarto, Giacinto Marietti, 1825, pp.256-258.
- (42) 伏若望前掲「徐保祿進士行実」一五四頁。
- (43) 李延昱『南呉旧話録』(上海古籍出版社、一九八五年)二六八～二六九頁。
- (44) 梁家勉・李天綱『增補徐光啓年譜』(前掲『徐光啓全集』一〇)一八八頁。
- (45) Alvaro Smedo, *The History of That Great and Renowned Monarchy of China*, pp.235-236.
- (46) イエズス会士が中国布教の初期において遭ったさまざまな小規模の教難について Alvaro Smedo, *The History of That Great and Renowned Monarchy of China*, pp.172-177 を参照。
- (47) 高龍鞏前掲『江南伝教史』一、一〇二～一〇三頁。
- (48) João Froes, *Anna da China de 1634*, Hangzhou, 17/4/1625, BA 49-V-6, fl.167v. Isabel A. Murta Pina, *Os Jesuitas em Nanguim (1599-1633)*, p.128 より転引。
- (49) 南京教難に関する代表的な研究には、Murta Pina, *Os Jesuitas em Nanguim (1599-1633)*, pp.106-136. 葛谷登「明末の南京教難における天主教士人の護教の論理」(『橋論叢』九二、一九八四年)、宝成関「中西文化的第一次激烈衝突——明季「南京教案」文化背景剖析——」(『史学集刊』一九九三年第四期)、万明「晚明南京教案新探」(『明史論叢』中国社会科学出版社、一九九七年)、鄒

振環「明末南京教案在中國教案史研究中的「範式」意義——以南京教案的反教与「破邪」模式為中心——」『學術月刊』二〇〇八年第五期）などがある。

- (50) 董少新「論徐光啓的信仰与政治理想——以南京教案為中心——」『史林』二〇一二年一月。
- (51) 明代の宦官と仏教との關係については、陳玉女『明代二十四衙門宦官與北京仏教』（如聞出版社、二〇〇一年）、杜常順『明朝宮廷与仏教關係研究』（中國社会科学、二〇一三年）などを参照。
- (52) たとえば、康志杰「明末來華耶穌會士与宦官交往評析」、『世界宗教研究』二〇〇一年第一期、夏伯嘉「天主教与明末社会——崇禎朝龍華民山東傳教的幾個問題——」、『歷史研究』二〇〇九年第二期。
- (53) たとえば、董少新「明末奉教太監廬天寿考」、『復旦學報（社会科学版）』二〇一〇年第一期。
- (54) 馬堂事件については、リッチ、セメード前掲『布教史』一、第四の書、第一一〜一四章を参照。
- (55) リッチ、セメード前掲『布教史』一、第一の書、第九章、一一二頁。
- (56) Alvaro Semedo, *The History of That Great and Renowned Monarchy of China*, pp.197-203.
- (57) セメード前掲『チナ帝國誌』四六一頁。
- (58) Alvaro Semedo, *The History of That Great and Renowned Monarchy of China*, pp.200-203.
- (59) Daniello Bartoli, *Della Cina, Libro terzo, Giacinto Marietti*, 1825, p.158. 高龍聲前掲『江南伝教史』一、一〇六頁。Alvaro Semedo, *The History of That Great and Renowned Monarchy of China*, p.221.
- (60) Alvaro Semedo, *The History of That Great and Renowned Monarchy of China*, p.222.
- (61) 伏若望前掲「徐保祿進士行実」一五四頁。
- (62) 伏若望前掲「徐保祿進士行実」一五四頁。
- (63) 高龍聲前掲『江南伝教史』一、一四四頁。Alvaro Semedo, *The History of That Great and Renowned Monarchy of China*, p.222.
- (64) 伏若望前掲「徐保祿進士行実」一五四頁。

奉教士人と在華イエズス会「上層路線」の展開——徐光啓と宣教師サンピヤシとの交際を中心に——（史）

- (65) 高龍鞏前掲『江南伝教史』一、一一四頁。
- (66) Pierre Morin, "Relation de 1621," p.60. Pfister, *Notices biographiques*, Tome I, p.107 より転引。
- (67) 当時澳門に追放されたのは、南京で布教していた宣教師アフォンソ・ヴァニョーニ、宣教師アルヴァーロ・セメード、宣教師マニュエル・ディアスと、北京で布教していた宣教師サバティーン・デ・ウルシス(熊三拔、Sabatino de Ursis)、宣教師ディエゴ・デ・バンターハであった。
- (68) J. G. ルイズ・デ・メデイナ『遙かなる高麗—16世紀韓国開教と日本イエスス会—』(近藤出版社、一九八八年)一〇七—一〇頁。
- (69) 初曉波『從華夷到万国的先聲—徐光啓對外觀念研究—』(北京大学出版社、二〇〇八年)。
- (70) 前掲『徐氏庖言』卷二「遼左陆危已甚疏」、一六三頁。初曉波前掲『從華夷到万国的先聲』八〇—九三頁。
- (71) 高龍鞏前掲『江南伝教史』一、一三七頁。
- (72) 与教士議計、欲伝教朝鮮、以海禁褻蔽、不能入、爰擬奉差東行、為宣化地。李杖「徐文定公行実」(宋浩杰等編『中西文化会通第一人—徐光啓學術研討會論文集—』上海古籍出版社、二〇〇六年)一三八頁。
- (73) Sección Japon-China de ARSI 189.19.メデイナ前掲『遙かなる高麗』一一〇頁より転引。
- (74) 伏若望前掲「徐保禄進士行実」一五八頁。
- (75) Daniello Bartoli, *Della Cina*, Libro terzo, pp.159-161.
- (76) Daniello Bartoli, *Della Cina*, Libro terzo, pp.160-161. Pierre Morin, "Relation de 1621," Pfister, *Notices biographiques*, Tome I, p.137より転引。
- (77) 黄徳寛「韓国教友与韓国天主教」(輔仁大学『神学論集』六四期、一九八五年)二九九—三〇五頁。
- (78) サンビヤシ、天津発信・一六二〇年四月二〇日付報告書。Sección Japon-China de ARSI 1611.49.メデイナ前掲『遙かなる高麗』一一〇頁より転引。
- (79) 前掲『徐氏庖言』卷一「恭承新命謹陳急切事宜疏」、一六七頁。また、廷臣たちの徐光啓の建議に対するさまざまな反応について

は、初曉波前掲『從華夷到万国的先聲』八三〜八四頁を参照。

(80) 奴迁遼民于北城、恣行荼毒。丁壮罹鋒刃、婦女遭淫汚。大拂出降之意、使此際有一旅号召、何難響應。此機之可乘者。前掲「恭承新命謹陳急切事宜疏」一六七頁。

(81) 前掲『徐氏庖言』卷三「仰承恩命量力知難疏」、二二二頁。

(82) 伏若望前掲「徐保祿進士行実」、一五五頁。

(83) そのベトナムの教難について、阮友心「關於天主教從十六世紀至十八世紀在越南传入与發展之初探」、『成大歴史学報』四〇号、二〇一一年）を参照。

(84) 康熙朝の典礼論争については、矢沢利彦『中国とキリスト教』（近藤出版社、一九七二年）、李天綱『中国礼儀之争』（上海古籍出版社、一九九八年）、黄正謙『西学東漸之序章——明末清初耶穌会史新論——』（香港中華書局、二〇一〇年）九四〜一九四頁などを参照。